

〔自著紹介〕

遠山暁・村田潔・古賀広志『現代経営情報論』有斐閣 2021年

古賀 広志*



デュルケーム (Émile Durkheim : 1858-1917) の掬みに倣えば、独立した学問 (discipline) には「独自の対象と独自の方法論」が不可欠である。しかしながら、デュルケームが切り開こうとした社会学において今日なお「社会学とは何か」が繰り返して問われている。本学部名誉教授の中河伸俊の言葉を引用すれば、社会学は「何 (どのような種類の対象) をどのようなやり方で調べる学問なのかについてしっかりした統一見解もなく、また、経験的な調査研究の方法と手順も決してよくまとまっているとはいえない」ために「社会学とは何か」を一口に説明することは難しいようだ¹⁾。もちろん、この引用は十年以上前のものだ。とはいえ、ここ十年間で大きく状況が変わったとは言い難いだろう。

情報システム研究も状況は変わらない。そもそも情報システム研究は、その誕生時期から情報システム研究は「独立した学問領域なのか」が繰り返して問われてきた。コンピューティングでもなく経営学でもないことから、「蝙蝠鳥」や「鶺鴒」のような存在として、どっちつかずの地位に甘んじていた²⁾。否、社会学から遅れに遅れ、今や「周回遅れのトップ」として最前線を走っている錯覚に陥っているかもしれない。

ところで、情報システム研究では、「経営情報システム」という表現が用いられることが多い³⁾。この場合、英文表記は「management information systems」である。ビジネスではなく「マ

* 関西大学総合情報学部

- 1) 中河伸俊 (2011) 「方法論のすすめ、もしくは先が見えたゴマメの菌ざしり」『ソシオロジ』56(1), pp. 81-84. 引用は p. 81.
- 2) 蝙蝠鳥とは「蝙蝠 (こうもり)」のことで、日蓮は『報恩抄』において「蝙蝠鳥のごとし、鳥にもあらず、鼠にもあらず」として、どっちつかずの中途半端な位置づけを揶揄する文脈で用いられることがある。あえて、コウモリではなく「そのような存在」であることを強調する意味で、日蓮の「蝙蝠鳥」という表記を採用した。
- 3) 1960年代に一大ブームとなった経営情報システム (MIS : management information systems) との混同を避けるために「情報システム」と呼ばれたこともある。誤解を恐れずに敢えて書けば、1960年代の議論は「古い MIS (old MIS)」と揶揄された。ところが、1990年代以降、問題解決に貢献するという

ネジメント」である理由は、マネジメント（経営＝管理）とは、事業体に限定されるものではなく、行政組織や非営利組織にも適用可能な概念であることから、敢えてマネジメントを冠しているのである⁴⁾。そのために、一口に「経営情報システム」と言っても、その含意は「世の中の情報システム」に近い。また、経営の要諦は「問題解決」であることから「問題解決に貢献する情報システム」というニュアンスもある。

これほど射程の広い概念であるために、「情報システムとは何か」や「情報システム研究とは何をどのように研究する学問なのか」が繰り返し問われることになった。しかし、議論を通じて、情報システム研究の共通分母として、「問題解決に役に立つシステムの開発の論理の解明と、その利用を通じた効果の考察、卓越した利用の背後に見え隠れする論理の探求」という問題意識が次第に明らかになってきた。そこで、これらの視点を含めた標準的教科書の刊行が求められたことは想像に難くない。その一つが本書の前身である『経営情報論』である。日本語で書かれ大方の賛同を得られた経営情報システムの標準的な教科書がない中で、同書は、経営情報論や経営情報システム論の模範となるべく存在であった。

もちろん、それまでも優れた教科書がなかったわけではない。技術偏重の教科書、さながら論文集のような統一感のないトピック集などは多数みられた。しかし、技術からビジネスまでの視野の広さ、論じられる各項目を貫く統一感をあわせもつ教科書の存在を筆者は寡聞にして知らない。まさに、帯に短したすきに長し、であった。そこで、標準的教科書を目指して本書の前身が編まれたのである。その後、度重なる改訂がなされ、2015年に新版補訂が公刊された。

ところで、新版補訂の公刊以後に、情報システム研究は、実践的転回や物質的転回の影響を受け、「デザイン・サイエンス」や「社会物質性 (sociomateriality)」などの新しい分析視角が登場してきた⁵⁾。その背景には、計量研究にありがちな「情報システムの導入」を独立変数、「業績などの効果」を従属変数とする計量調査が多数報告される中で、具体的な情報システムの利用の現場を捨象して「ダミー変数」として情報システムが扱われていることに対する不満が募ってきた（のかもしれない）。筆者は、そのような問題意識に立脚する研究を総称して「551研究」と揶揄している。関西では有名な「551があるとき～ワッハッハ、ないとき～シュー

ニュアンスを強調して MIS という名称が用いられることが多くみられるようになってきた（と思われる）。

- 4) 経営を組織論管理論として捉える考え方については、関西大学名誉教授の飯野春樹に負うところが大きい。たとえば、飯野春樹（1963）「バーナードの流れをくむ管理論について」『関西大学商学論集』8(2), pp. 133-158, 飯野春樹（1965）「組織論的管理論の一体系」『関西大学商学論集』10(3), pp. 139-173を参照されたい。また、飯野の高弟である庭本佳和の『バーナード経営学の展開』文真堂（2006年）も参照されたい。
- 5) デザイン・サイエンスについては、古賀広志（2019）「デザインサイエンス研究の系譜と課題」『日本情報経営学会誌』38(4), pp. 36-56の文献レビュー部分を参照されたい。社会物質性については、遠山 暁（2019）「情報経営研究における社会物質的パースペクティブの可能性」『日本情報経営学会誌』39(3), pp. 5-27. を参照されたい。

ン」と同じ構造で「情報システムのあるとき～ないとき～」と論じているからだ。

実は、IoTなどの新技術を背景に、技術的側面よりもますます「情報システムが問題解決の現場でどのように活用されているのか」に注目する立場が情報システム研究の中心的地位を占めるようになってきた。ただし、このような立場は、1990年代に「同様の情報システムを導入しても企業成果に相違があるのはなぜか」という疑問から、個別事例の記述の重要性が指摘されたことを淵源にしている（筆者は、優れた組織過程をもつ企業だけが情報システムを使いこなすことができるという意味で「鬼に金棒」と理解し、金棒の強さだけでなく、それを使いこなす鬼＝組織要件に注目する必要があると主張してきた）。

加えて、このような動向の背景には、情報システム研究の学問的独立性の一つの答え、すなわち「情動的実践」と呼ぶべき独自の対象を方法論的多元主義の立場から考察するという学問的アイデンティティ確立の問題意識が深く関わっている（蛇足を承知で書けば、「多元主義」と書くとMS-Wordが「誤り」だと青い下線を提示し警告してくるのは面倒だ）。

そこで、旧書を全面的に改訂し、(1) 社会構築主義・社会物質性という視点からの記述、(2) DX (Digital Transformation) 環境を前提とする記述、(3) ELSI (Ethical, Legal and Social Issues) とりわけ情報倫理の議論を取り込むことで、新時代（さすがに「人新世」とすれば言い過ぎであろう）の標準的教科書として改めて編み直されることとなった。

まず、情報システム研究では、2000年代より「社会構築主義」の視点が広く受け入れられている。それにも関わらず、SCOT (social construction of technology) の立場に立脚する日本語の教科書は皆無であった。むしろ、それ以前の（551問題のような）技術決定論の視点を採用しているものばかりである。時代遅れの技術決定論からの脱却が本書の特徴の一つである。

第2に、近年とみに注目されるDX環境の可能性と限界を扱う経営情報論の教科書が存在しないことから、これに関する知識を学ぶことのできる教科書の出版は、学術だけではなく社会的に見ても有益であると考えられる。

最後に、欧米の標準的教科書において必ず章を割いて記述されている情報倫理の視点を積極的に取り込んだ点が本書の第3の特徴である。たとえば、技術開発における「責任性」を重視したRRI (Responsible Research and Innovation) の議論を取り上げるなど「自律的な市民として情報社会に主体的・積極的に参加できる人材を育てること」に留意した内容となっている。

具体的な章構成は次の通りである。

- 第1章 経営情報論の基礎
- 第2章 経営情報論の基礎理論
- 第3章 経営情報システムとは何か
- 第4章 情報通信技術の進展と組織
- 第5章 経営情報システムの設計・開発
- 第6章 経営情報システムの管理
- 第7章 情報通信技術を活用したビジネス・ノベーション

第8章 ネット・ビジネス

第9章 情報通信技術と組織コミュニケーション

第10章 ビジネスインテリジェンスとナレッジマネジメント

第11章 情報通信技術と社会・倫理

第12章 経営情報論と経営情報システムのこれから

筆者が担当したのは、2章、9章、10章である。従来の伝統的教科書と異なり、社会物質性の視点から、プロセス管理、コミュニケーションにおけるジャンル、データサイエンスの基礎となる技術的側面とその利用的側面の解説を行った。

改めて言うまでもなく、本書は、基本情報処理技術者試験や中小企業診断士などの資格試験の参考書としても有益である（と自負している）。アジャイル開発やUMLなどの基本的事項についても間にして要を得た解説を施している。また、ITガバナンスや内部統制などについてもCOBITの枠組みを基礎に議論しており、他に類を見ない教科書となっている。いろいろと書き連ねたいが、詳しい内容について触れる前に紙幅が尽きてきた。

幸い、発刊から好評を得て増刷の機会を得た（本稿の校正中に第3刷が決定した）。今後も改訂を重ねながら、わが国における情報システム論の標準的教科書となることを期待し、日々精進したいと思っている。自著紹介ということだが、教科書でかつ共著であることから、本書が登場した学問的背景を紹介することを中心に記述した。では、その内容は？ という疑問を抱かれた読者の皆さんは、是非とも本書を手にとっていただきたい。